東京外国語大学国際日本研究センター主催　夏季公開セミナー2013

「国内外における大学院生による研究発表会」

夏季公開セミナー2013
「言語・文学・歴史－国際日本研究の試み」

2013年7月31日(水) 16:15－19:30、8月1日(木) 14:45－17:00 @東京外国語大学留学生日本語教育センター103室、107室
※各発表20分。時間内（ ）はQ&A及びセミナー講師などのコメント10分

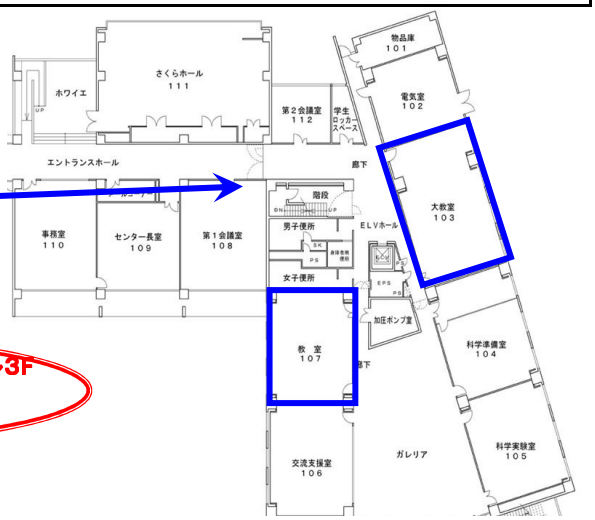
	time	大学院生氏名	所属	題目	概要
7月31日（水）@留日103室（司会 谷口）「言語」	16:15-16:35 (-16:45)	片山 晴一	東京外国語大学大学院博士後期課程	日本語における移動手段の表現—中国語との対照から	日本語の移動表現では、移動手段は「自転車で行く」のように「デ格」で標示される。「自転車に乗って行く」のように表すことも可能ではあるが、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(国立国語研究所)に基づけば、日本語の移動手段は「デ格」を用いる頻度が高い。一方、対応する中国語では〈我骑自行车去了公园〉(自転車に乗って公園へ行った)のようにV1が移動手段(骑/坐等)を表す動詞、V2が〈来/去〉等の方向動詞の組み合わせからなる「連動式」が用いられる。中国語の連動式の卓越性は、中国語母語話者の日本語学習者にみられる誤用「台北までバイクで乗って行って来ました」(東京外国語大学国際日本研究センター2012「英語・中国語・ウクライナ語/ロシア語母語話者による日本語学習者作文コーパス及び抽出誤用コーパスVer.1,1&1.2」)にも反映される。本発表では、移動手段が日本語では「デ格」句、中国語では時間順語順に基づく連動式のV1という形式をとることを類型的視点から示し、日本語教育への応用について考える。
	16:45-17:05 (-17:15)	張志凌	東京外国語大学大学院博士後期課程	複合動詞「～こむ」の副詞的意味について	複合動詞「～こむ」の用法は多岐にわたるが、本発表では、「入り込む/信じ込む」のような、V1が項構造を決定し、V2「～こむ」は副詞的意味をもつ用法(左側主要部型「～こむ」)に焦点をあてて、その意味構造を考察する。分析にあたり、樋口(2001)が提示した「資格付け的評価」と「価値づけ的評価」という枠組みを用い、V2「～こむ」の副詞的意味成分を分析すると、以下の四種類に分類できることを示し、中国語を母語とする日本語学習者にどのように教えるかを考察する。① 価値づけ的評価+内部移動/状態変化 野良猫が庭に入り込んだ。＜価値づけ的評価:マイナス+内部移動＞ ② 資格づけ的評価+内部移動/状態変化 「冷え込む」:＜資格づけ的評価:激しい+状態変化＞③ 程度副詞+内部移動/状態変化 「植え込む」:＜程度副詞:しっかり+内部移動＞ ④ 価値づけ的評価+程度副詞+資格づけ的評価+内部移動/状態変化 「信じ込む」:＜価値づけ的評価:マイナス+程度副詞:かなり+資格づけ的評価:深い+状態変化＞
	＜休憩15分＞				
	17:30 -17:50 (-18:00)	朱炫姝 ジュヒョンジュ	筑波大学大学院博士後期課程	日本語授受表現と韓国語授与動詞の体系に関する対照研究-『韓日並列コーパス』を用いて	日本語授受表現が「話し手の立場や視点」によって「てやる・あげる・さしあげる」「てくれる・くださる」「てもらう・いただく」表現に分かれるのに対して、韓国語では同様に作用しないことに注目し、両言語の授受表現の体系について、『韓日並列コーパス』の例文を中心に考察した。その結果、『韓日並列コーパス』から合計1171例の授受表現が収集でき、「てやる」「てあげる」「てくれる」を「-어 주다(-eo juda)[てあげる・くれる]」で表現する場合と、授受の意が入っていない本動詞のみで訳されている例文が多く見られた。「てやる」と「てくれる」を「-해 놓다(-he notta)[ておく]・-해 버리다(-he beorida)[でしまう]」に替えて表現する例文もあった。「てもらう・いただく」の場合、韓国語では直訳では示せないが、本動詞のみで表現される場合と、本動詞が省略されて授与動詞「받다(batta)[もらう]」を本動詞として表現される場合があることなど両言語授受表現の特徴を指摘できる。
	18:00-18:20 (-18:30)	孫 斐 Sun Fei	北京大学大学院博士後期課程	日本語のテクレルと中国語の「让你」———説明文における無情物が主語の場合を中心に	先行研究では無情物が主語のテクレル文はテクレル文のより周辺的な用法だと考えられている。発表者の調査ではこのような構文は女性誌の美容ページではよく使われていることに気がついた。同じような意味を言い表すときは、中国語では「让你」がよく使われているようだ。では、日本語のテクレルと中国語の「让你」はそれぞれどのように使われ、どのような意味を表しているのか、本発表で明らかにしたい。結論としては、第一に、テクレルと「让你」の両方に読み手の立場を前景化する機能があるが、方法が異なる。次に、説明文においてテクレルは間テキスト性があるが、「让你」は間テキスト性がない。最後に、説明文におけるテクレル文は中国語の「語彙的マーカー＋你」とほとんど対応することがわかった。
	＜休憩15分＞				
	18:45-19:05 (19:15)	孟会君 Meng Hui Jun	北京外国語大学 日本学研究センター博士コース	日本語におけるサ変複合動詞二重ヲ格構文について	日本語において、「単文異格の原則」(一つの単文には同一の深層格を担う名詞句が共起できない)のため、二重ヲ格構文が原則的には許されないが、それが確かに存在するのも事実である。本稿では、「茶漉(一般公開版)」や「現代日本語書き言葉均衡コーパス(中納言)」などにより、そのうちの述語がサ変複合動詞であるものを検索し、政治や文学などの特定の分野においては、サ変複合動詞二重ヲ格構文が絶対にまれではないということが分かった。本論文は、二重ヲ格制約の本質と射程を究明することを目的に、こういう二重ヲ格構文を対象とし、その使用実態や表現効果、統合構造、制約条件などについて検討してみようとするものである。
7月31日（水）@留日107室（司会 友常）「文学」	16:15-16:35	藤井嘉章	東京外国語大学大学院博士前期課程	「本居宣長の注釈における俗言」	契沖や賀茂真淵と言った近世国学研究による新注と呼ばれる帰納法的な注釈方法の流れにある本居宣長の注釈を確認する。その中で、古言をもって古言を解することを基本とする新注の方法において、宣長が、その当時の同時代語であった俗言を用いて注解を行っていることに着目する。それを通じて、契沖以来の新注の方法を継承する宣長と、そこには回収しきれない宣長の独自性を明確化する。テクストについては、特に宣長学において文学研究のカテゴリーに属するものを扱う。『古今集』の俗言訳である『古今集遠鏡』において、宣長の俗言に対する認識を、その「例言」から理論的に検討する。次いで主に『古今集遠鏡』、『新古今集美濃の家づと』、及び『源氏物語玉の小櫛』五の巻以降の本文注釈から、俗言による注解の実際を取り上げ、宣長の注釈において俗言が果たす役割について検討する。
	16:35-16:55 (-17:05)	李智賢 Lee Gee Hyun	韓国外国語大学校大学院修士	『源氏物語』における「梅」のイメージ	『源氏物語』の巻名には登場人物の和歌に詠み込まれている場所、天候、植物などの自然景物が多く含まれている。そこで、巻名は登場人物の人間関係によって特徴付けられたり、巻名が花の名前の場合はそのまま女君の名前になることもある。例えば、「夕顔」、「若紫」、「末摘花」、「蓼」、「朝顔」などである。このような『源氏物語』の巻名と登場する女君の名前は物語の主題を先取りしたり、あらすじを象徴したりする。特に五十四帖の中で梅の花が巻名に入るのは、「梅枝」と「紅梅」の二巻がある。この発表では『源氏物語』に登場する「梅」を分析し、絵巻の中で「梅」がどのように描かれているのかを究明してみたい。
	＜休憩15分＞				
	17:20-17:40	徐廷瑋 Syu Ting Wei	国立台湾大学大学院博士前期課程	『国性爺合戦』『国性爺後日合戦』に見る近松の父親像	本稿は、近松門左衛門の『国性爺合戦』『国性爺後日合戦』の両作に渡って登場する和藤内の父・老一官の評価とその造形についての再検討を試みるものである。老一官は、鄭芝龍という明朝再興にまつわる実在人物をもとにして創作されたが、作中ではその活躍ぶりが制約されて、これまで「無能な老人」などと消極的に評価されている。しかし『国性爺合戦』に「慈あるる父」という言葉や、『後日合戦』に老一官の犠牲を「慈悲ある体に振舞」いと評価することから、近松は老一官を描く際に、この「慈父」を意識した可能性があると推測する。本稿ではまず、二作における老一官の描写を取り上げて分析し、次に歴史における鄭氏父子の親子関係と比較検討し、さらに当時の父子関係に関する思想の考察を通して、江戸社会に求められる父親像を考察する。以上の考察を通して、近松の描いた老一官の新たな側面を見出し、今後の近松浄瑠璃の人物造形の研究の可能性を考えてみたいと思う。
	17:40-18:00 (-18:10)	張芸 Zhan Gyi	東京外国語大学大学院博士前期課程	「文学作品解読における権威への挑戦——夏目漱石と意識共同体」	時空を超越し読者に感動を与える漱石。彼が既にこの世を去って97年経った今も、依然として私たち世界中の読者を共鳴させている。この共鳴の持続は、ただの偶然か、或いは作者の計算通りなのか。この問題は研究者たちの間で何度も提起されたが、明確な答えは未だ出されていない。「維新の志士の如き烈しい精神で文学をやってみたい」と言った漱石自身はこの問題についてどう思うのだろう、という疑問を持ちながら、私は考察を始めた。その結果、作品における作者のコントーロールカと創作意識という問題に辿り着いた。心理学と文学を共有する意識共同体というコンセプトは正に先に述べた疑問を解く鍵だと信じ、本研究を通して明らかにしたいと思う。
	＜休憩15分＞				
	18:25-18:45	陳璐 チン ロ	東京外国語大学大学院博士前期課程	「北村透谷試論——琴と自然をめぐって」	明治時代の詩人・文学家・思想家である北村透谷は、若いころから漢学を学び、後キリスト教に入信したが、死ぬ直前にはキリスト教に対する懐疑的な姿勢も現しているように見える。今発表では、透谷の最初の長詩『蓬莱曲』に着目し、その中に出てきた「琵琶」のイメージと、「弾琴」「弾琴と嬰児」の二つの短詩に関連づけ、また「万物の声と詩人」に出てくる「宇宙の中心における大琴」という透谷の神髄を示している重要な言葉への考察から、論を立てる。また、透谷の思想を貫いているものとして捉える「琴」という楽器の由来を探り、和漢の文学作品の中で「琴」はどういうイメージを持っているか、透谷はどういう意味で「琴」を作品のモチーフとしたかを、彼の文章から具体的に分析することで、東洋的視点から透谷思想の一面を窺いたい。
	18:45-19:05 (19:15)	南徽貞 ナムフィジョン	東京外国語大学大学院博士後期課程	「1970年代の日韓文学の諸相—大江健三郎と李清俊」	日本の戦後世代を代表する作家・大江健三郎(1935～)と韓国の4.19(4月革命)世代を代表する作家・李清俊(イ・チョンジュン、1939～2008)は、それぞれ日本と韓国の現代文学史において重要な位置を占める同時代の作家である。両者はそれぞれの国における戦後民主主義の政治が孕んでいる矛盾を小説のなかで鋭く追及してきた知的作家である点で強く共通している。 73年のオイルショックで日本の高度成長が一旦途絶し、不況に陥った1970年代は、日本の戦後史における大きな転換期であり、一方、韓国では朴軍事独裁政権が国の内外でその存立基盤を激しく揺り動かされる深刻な地殻変動に直面した時期であった。本発表は、この時代における両者の代表的な作品を比較しつつ眺めることによって、彼らの同時代認識を明らかにしようとする試みである。

夏季公開セミナー2013「国内外における大学院生による研究発表会」

2013年7月31日(水) 16:15－19:30、8月1日(木) 14:45－17:00 @東京外国語大学留学生日本語教育センター103室、107室

	time	大学院生氏名	所属	題目	概要
8月1日（木）@留日103室（司会 坂本）『言語』	14:45-15:05 (-15:15)	ツォイ・エカテリーナ	東京外国語大学大学院博士後期課程	「現代の茶席の会話におけるポライトネス研究」	本発表は、「場をわきまえる」側面が強いとされる茶席の会話におけるBrown and Levinson(1987)のポライトネス・ストラテジーとIde(1989)の「わきまえ」という捉え方を検討したものである。量的分析では、茶席の自然会話データにおけるポライトネス・ストラテジーや「わきまえ」の比率を調べた上、話者の親疎関係や茶席における行動の自由度、場面の公私による比率の変動を見た。質的分析では、Usami(2002)のディスコース・ポライトネス理論を参考に、ポライトネス・ストラテジーや「わきまえ」、それぞれの観点から解釈を試みた。結果として、次のようなことが示唆できる。「わきまえ」に関しては、話者が親しくない場合や公的場面としての茶席の場合は「わきまえ」による発話が増える傾向にあるが、全体的に「もてなしの場」である茶席においては相手のフェイスに働きかける発話が圧倒的に多い。その中で、話者間の親密な関係構築に有用なポジティブ・ポライトネスが多用される。ディスコース・ポライトネス理論の観点から見ると、「わきまえ」のポライトネスでは説明仕切れない茶席での雑談、形式からの逸脱、形式的な発話の言い直しや回避はポジティブ・ポライトネスとして捉えられる。
	15:15-15:35 (-15:45)	崔英才	東京外国語大学大学院研究生（千葉大大学院博士前期課程修了）	電話問い合わせの談話の展開—全体構造と情報部の談話進行—	本研究は中国人日本語話者と日本語母語話者の接触場面における電話問い合わせの談話の展開と構造を分析したものである。調査は実在する某問い合わせ先の協力を得て行われ、13例のデータを収録して分析した 。分析の枠組みとして「話段」の概念を援用した。結果、問い合わせの談話を構成する話段に3つの種類、「情報求めの話段」、「情報案内の話段」、「相互確認と終了の話段」があることが判明した。また、問い合わせの談話は「用件提示部」と「情報部」の二部構造を持つ談話であることが明らかになった。次、情報部の談話進行に3つのパターンがみられ、談話進行に影響する主な要素として「質問者の談話の目的」と「質問者の談話における主導権の保持の仕方」があることが分かった。なお案内者側の共通点として、莫大な情報量の中から質問者が求める情報を絞ろうと試行する案内ストラテジーがみられた。
	＜休憩15分＞				
	16:00-16:20 (-16:30)	申鉉珍 Shin Hyun Jin	韓国外国語大学大学院	否定を表す副詞のあり方—マサカの「使用場面」を中心に—	現代日本語の副詞マサカについて、これまで多様な研究がされてきたが、主に述語形式との共起制限に基づいており、話し手が伝達レベルにおいてどのような場面で、どのような文にマサカを用いるのかに注目した研究はあまり見られない。そこで、本研究では先行研究の分類にこだわらず、使用場面を視野に入れ、文のタイプによる分類を行い、また、その文の中で共起する文末形式との意味的関連性を考察することで、その意味用法を明らかにすることを目的に実例調査をすすめた。その結果、マサカが独立語文で現れる場合が多いこと、文法的肯定疑問文にも現れること、すべてがマイナス状況を表すのではないことが新たに分かった。また、意味用法を「否定(さらに、「婉曲的な否定」と「情意的ニュアンスの否定」)」「否定的推量」「反意」「肯定」に分類することができた。
	16:30-16:50 (-17:00)	李 国玲 リコクレイ	筑波大学大学院博士後期課程	日中「不満表明行為」に関する対照研究—「行動の仕方」を形づくる諸要素について—	本研究では、談話完成テストにより収集した不満表明発話を「切り出し部」「用件内容部」(さらに、「主要行為部」と「補助部」に分けた)「終了部」という3段階に分けて、各部分の構成要素の出現率と意味公式を分析し、ポライトネスの観点から日中それぞれの語用論的特徴を考察した。その結果、「切り出し部」では、日本人は恐縮の意を表明しながら注目喚起をする表現を多用し、中国人は親近感を示す呼称名詞や挨拶表現を多用する。「用件内容部」では、「主要行為部」を補助するために、日本人は＜不利益告知＞を多用し、中国人は自分の意見を正当化する根拠を取り上げる＜理由提示＞を多用する。「終了部」では、日本人は謝罪系表現を、中国人は感謝系表現を多用する。以上の考察結果から、不満表明発話のFTA度を緩和するために、日本人はネガティブ・ポライトネスを考慮するのに対して、中国人はポジティブ・ポライトネスを考慮することが明らかとなった。
8月1日（木）@留日107室（司会 前田）『歴史・社会』	14:45-15:05 (-15:15)	臼井直也	東京外国語大学大学院博士後期課程	「海外における日本アニメ受容の通時的分析の基礎研究—大藤信郎作品が近年のアニメ人気に与えた影響に関する一考察—」	海外で日本の「アニメ」が高い人気を得ていることは周知である。このアニメ人気は1998年からのアメリカでの『ポケットモンスター』のテレビ放映、宮崎駿の『千と千尋の神隠し』のベルリン国際映画祭金熊賞受賞、アカデミー賞長編アニメ映画賞受賞などに端を発するものであるが、海外における日本アニメの受容は1918年に始まっている。また、日本のアニメに対する国際的な評価は1953年、大藤信郎の『くじら』のカンヌ映画祭短編部門ノミネートにまで遡ることができる。本研究は、これまで断片的に紹介されてきた海外における日本アニメの受容史に現地資料などを加え通時的に分析し、日本アニメと海外との関わりの歴史的変遷を明らかにするものである。本研究では海外における日本アニメの受容を分析する端緒として、日本で初めて国際的評価を得たアニメ作家の大藤信郎を対象とし、大藤信郎の作品が近年の海外におけるアニメ人気に与えた影響について考察を試みる。
	15:15-15:35 (-15:45)	簡孝阡 Chen Shiau Chian	国立政治大学大学院修士課程	「日本アニメにみる理想の家族像—『サザエさん』を例に—」	1969年からテレビ放映されたアニメ『サザエさん』は、三世代の家族が一つ屋根の下で暮らす様子を描いたドラマである。サラリーマンである夫たちが家計を支え、主婦である妻たちが家事を担う。子供たちは明るく元気で、悪戯もするが程度を弁え、概して聞き分けがいい。第一世代の父の権威のもと、家族は仲良くまとまり、食卓を囲む様子からは、穏やかな雰囲気が漂う。 このような『サザエさん』の家族像は、一見すると古き良き理想の姿として長年描かれ続けてきたように見えるが、実は、1990年代から現在にかけて創られた、今の人々が求めるイメージに過ぎない。かつての『サザエさん』が描く、現在のそれとは異なる家族像を知れば、このことは明瞭である。 現在の『サザエさん』の家族像は、同作品が様々なクレームに対応しつつ、高視聴率を維持してきたことを考慮すれば、国民によって想像されたものと言っても過言ではないであろう。
	＜休憩15分＞				
	~~16:00-16:20~~ ~~(-16:30)~~	飯倉江里衣	東京外国語大学大学院博士後期課程	日本の植民地支配下における朝鮮人の軍事的敵対関係—「満洲」抗日パルチザン／満洲国軍の朝鮮人を中心に—	本発表では、日本の植民地支配下で朝鮮半島から「満洲」へ移住し、中国共産党の指導下で結成された抗日パルチザン組織と、日本の傀儡国家の軍隊である満洲国軍、それぞれに参入した朝鮮人に焦点を当てる。中でも、日本の植民地支配の下でなぜこれらの朝鮮人が敵対関係に置かれたかを見ていくことで、日本の朝鮮植民地支配と「満洲国」支配の内実を明らかにする。 まず、抗日パルチザンと満洲国軍へ参入する朝鮮人の「満洲」移住がどのように異なっていたかを比較して見ていき、日本の植民地支配によって生じた朝鮮人の間の階層差の問題を示す。次に、彼らのそれぞれの軍事組織への参入がどのように行われたかを、両者の軍事的敵対関係をつくり出した日本の「満洲国」軍事支配戦略と共に論じる。 最後に、日本の植民地支配から解放された後に朝鮮半島に帰還したこれらの朝鮮人が、南北朝鮮の軍事的側面において多大な影響力を及ぼしたという問題提起を行う。
		→ 飯倉さんの発表は、7月31日(水)19:15- @107室に変更になりました			
	16:30-16:50 (-17:00)	許文英 キョブンエイ	東京外国語大学大学院博士前期課程	「徳島藩蜂須賀重喜の隠居政治—公家との姻戚関係を通して—」	徳島藩蜂須賀家十代藩主・蜂須賀重喜は明和六年(1769)十月晦日において、蜂須賀重喜が幕府に「政事不宜」という理由で隠居を命じられた。しかし、幕府が言い付けた理由については、多々の疑問があり、それに関しての研究もいくつかが挙げられる。その中で重喜の隠居事情を真正面から検討するのは笠谷和比古氏である。笠谷氏は重喜の強烈な異腹家臣排除政策は幕府が容認できなかったというところに求めた。 しかし、重喜が隠居後の活動、特に公家との姻戚関係(重喜は自分の娘・三人とも公家の家に嫁がせた上で、公家出身の娘を養女として迎え、息子たちに嫁させた。)などの分析を通して、重喜が幕府に隠居を命じられたのは、彼と家臣の不和というより、当時の幕藩関係から考察すべきではないかと思われる。 そして、江戸時代中期において、幕府と藩の関係を検討する上で、この時期の公武婚姻の意義を考察しようとするものです。

夏季公開セミナー2013
「国内外の大学院生による研究発表会」会場
留学生日本語教育センター　103室、107室
7月31日(水)16:15-19:15、8月1日(木)14:30—17:00



夏季公開セミナー2013会場 アゴラグローバル3F
～言語・文学・歴史　国際日本研究の試み～
7月31日(水)～8月2日(金)10:00－16:00(8/1は～14:15)